

東日本旅客鉄道労働組合

東京都渋谷区代々木2丁目2番6号

JR新宿ビル13F 〒151-8512

Tel. 03-3375-5740 (代)

発行責任者 大熊勝明

JR東労組

本部OB会

ニュース

No. 156 2011年4月 発行

東日本大震災

被災者に義援金を贈ろう！

東北・関東一帯に大被害

三月十一日十四時四十六分、宮城県牡鹿半島沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震と津波によって、東北・関東一帯で死者・行方不明者二万数千人、負傷者数千人、損傷・流失した建物十三万数千戸という空前の大被害が発生しました。おおくのりになった方々の「冥福をお祈りする」と共に、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

また被災された方々から復興に向けて立ち上がっておられる皆さん、ボランティア活動に奮闘されている皆さんに心から敬意を表します。

「人災」福島原発事故に怒り

この未曾有の大震災と共に深刻なのが、東京電力福島第一原子力発電所の爆発と放射能放出事故です。この福島第一原発は、建設当初から携わった関係者からも「安全に対する不安」の声も上がっていた代物であり、今回の大地震と津波で被災した「想定外の事故」と簡単には済まされない事故です。本当に怒りを覚えます。

世界観測史上の巨大地震ベスト5

No.	発生年月	地震名	マグニチュード
1	1960年5月	チリ地震	9.5
2	1964年3月	アラスカ地震	9.2
3	2004年12月	スマトラ沖地震	9.1
4	1952年11月	カムチャッカ半島地震	9.0
4	2011年3月	東北地方太平洋沖地震	9.0

今回の東日本大震災によって、JR関係者や鉄道施設にも大きな被害が出ました。社員自身や社員の家族を亡くした方も大勢おり、OB会員の安否も確認されていない方も大勢います。また新青森駅まで開通したばかりの東北新幹線も那須塩原～盛岡駅間の設備が破壊され、またローカル線も壊滅的な打撃を受け、復旧の

被災に負けず早期復興に立ち向かう 組合員OBの「ヒューマンズ」支援を！

しかもその被害は、長年住み慣れた土地から県外に避難させられ、周辺県の野菜や近海の海産物までもが放射性物質に汚染され、消費者に恐怖心を募らせているばかりか、その影響もいつまで続くのかわからないという不安感も与えております。この福島第一原発事故を一日も早く終息させ、日本のエネルギー問題のあり方をもつ一度見つめ直す機会にしなければなりません。

見通しが立っておりません。

しかし今、JR社員と関連会社の社員が総力を上げて、一日も早く東北新幹線を初め生活路線のローカル線を早期に復旧させようという奮闘をしています。

甚大な被害を受けた人達も負けてはいません。避難所の中では、小中学生が高齢者の肩もみをしたり、食事作りの手伝いをする微笑ましい光景や新しい小さな生命の誕生など、復興を確信させる明るい兆しも見えています。

今こそJR東労組OB会の「ヒューマンズ」を發揮しよう！

私たちOBは戦中と戦後の一時期、食糧難や生活物資の不足による耐乏生活を強いられたものの、その後は日本経済の復興期・成長期、そしてバブル期と比較的恵まれた時代を生きてきました。

その間の鉄道人生では、良き労働組合にも恵まれ、特にJR発足後は



仙石線・野蒜駅構内で津波に流された電車

「抵抗とヒューマンズ」を基調とした人間味あふれるJR東労組運動によって「労働者・人間」として大きく成長しました。今、大地震と津波そして目に見えない放射能汚染で避難生活を余儀なくされている人は四〇万人以上います。

また直接に被害を受けなかった人も、ガソリン不足や買い占めによる生活物資のひっ迫、計画停電等による不自由な生活を強いられる人等、日本中の人達が何らかの形で受難しています。しかし被災地の人達の苦難から見れば恵まれた生活をしていると言えます。

そこで本部OB会は、被災者支援の「義援金」を募る活動を行なうこととしました。

取り組みの方法は、各地本OB会ごとに集約しますので、被災者支援のための義援金活動に積極的なご参加を心よりお願いいたします。

今こそ示そう！
「OBのヒューマンズ」を！

被災地に支援の輪を！

本部OB会より、義援金のお願い

◇ 期間 2011年4月1日～5月31日

◇ 方法 各地本OB会ごとに募ります。



※ 6月以降も支援の取り組みは継続をさせていただきます。

盛岡地本の役員と組合員の懸命な救援活動によって、被災状況やOB会員の安否確認も少しずつ進んできました。特に青年部が中心になって、自転車でOB会員宅を廻って被災状況を調査してくれたのには大変感激し、心から感謝しております。

被災したOB会員も一生懸命生きてます

また支部のOB会役員も若い人と同じようには行きませんが、少しずつ被災したOB会員宅を廻って激励しております。

携帯電話で通信できるOB会員には被災状況を聞いておりますが、一人ひとりの安否確認となると中々はかどらず、やきもきしています。

私の住んでいる若林区には、貞山堀と海の間には黒松林があり、その黒松林が波を抑えてくれるとの言い伝えがありました。今回、その松の木の高さを乗り越えて津波がやってきました。逃れてきた人は「まさか」という気持ちだったそうです。藤家は二戸、井土浜の村では、戸しか家屋が残っていません。二木(ふたき)

から逃げてきたお婆ちゃん、田の中を這って土を掴みながら泥だらけで逃げました。近くの学校は避難して来た人で溢れ、寒さに震えています。一人一枚の毛布に包まって必死に寒さに耐えています。

JR総連はじめ各地方本部からの温かい多くの支援物資が「こぶし会館」に届いています。こんな強い事はありません。

盛岡地本OB会員も地震の後の大津波で命からがら逃げたものの、家屋が流失したり、浸水等で生活が出来なくなった人も数多くおり、今、親戚宅や避難所での生活を余儀なくされておりますが、皆さん、復興に向かって雄々しく起ち上がり、一生懸命生きておられます。これからもOB会の皆様のご支援を宜しくお願い致します。

盛岡地本OB会 小田島 彰

東日本大震災 被災地からの支援の訴え

被災から四日目、ボランティア活動の合間を見て、広瀬川の堤防沿いに閉上方面に行ってみると、警察官が泥だらけになった死体を土手の横に並べていました。私は思わずOB会員でないことを念じてしまいました。

まだまだOB会員と連絡とれず

ライフラインも完全に破壊され、電話も通じない毎日。海岸近くに住んでいた人達と津波と原発事故の被害が大きい巨理、南相馬方面の仲間が心配です。支援の力をお願いします。

仙台地本OB会 林 英夫

今、福島県浜通り地区は、大地震と大津波の被害に加え、福島第一原発放射能被害の三重苦で喘いでいます。

浜通り一帯は10mを超える大津波が沿岸より3〜4kmも入った内陸部にまで押し寄せました。内陸2km一帯は、家屋が完全に流出し、3〜4km地帯は、家屋の

福島県浜通りは地震・津波・原発の三重苦

一部損壊や床上浸水により人が住めなくなっています。

私の住む新地町も沿岸の5部落が完全に消え失せ、死者・行方不明者は100名に達しようとしています。

水戸地本OB会 佐藤 治

私は現役ですが、今回の大地震と大津波によって自宅が床上浸水して住めなくなり、家族3人で近くの小学校で避難生活をしています。

避難所の食事は、自衛隊が炊き出しをしており、一日二食が出されます。

おにぎりを食べる姿を見て、思わず涙が

食料に余裕のある日は、子供と高齢者に昼食が出ることもあります。小さなおにぎりでも誰も文句も言わず、美味しそうに食べている姿を見ると、つい涙が頬を伝わります。

この体育館には昼間2500人の人が

OB会員も多数住んでおり、七〇名の会員中、安否が確認されているのは未だ六〜七名で大変心配しております。

現在の新地町は、いま救援物資で食いつないでいる状態です。町民は何としてもこの災難を乗り越え、互いに協力し合って復旧に向けて必死に頑張ろうとして

います。私の家も一部被災しましたが、ボランティア活動に参加しています。

原発事故は人災です。浜通り一帯には人影もなく、野菜や海鮮類も放射能で汚染されました。その影響は県外にも及び心配です。福島を助けて下さい。

避難してはいますが、夜には自宅に戻る人もいます。暖房も少なく寒い夜もありますが、幸いにも私は二階から服を持ち出せたので、何とか寒さを防いでいます。

水道・ガス・電気などのライフラインが使えないので自宅に戻れず、いつの日になるのかと、気がめいる時もありますが、

先日、組合の役員の人々が激励に来てくれて、本当に組織の有難さを感じました。

OBの皆さんも大変だろうと思いますが、一緒に頑張りましょう。

仙台地本 下村 良雄(五七歳)

エルダー制度・第一期生を経験して

長野地本・長野支部OB会 西澤 繁和

平成二十年七月、現在勤務している日南田電気(株)に出向して二年八ヶ月が過ぎました。途中、JR退職を機にエルダー制度を活用して、二年三月月が過ぎました。

私のエルダー職場 職場紹介

日南田電気(株)は、JR東日本の協力会社としての仕事を、JR以外の仕事をこなしています。社員数は五〇余名で女性社員は八名、JR東日本の出身は七名で、うち一名がエルダー社員(元JR東日本)です。私は、安全衛生関係、各種資格取得管理関係、品質管理に関すること等、幅広い業務に携わっています。エルダー社員として出向する中、出向先の風土に馴染むことも無意識に努力するため、六〇歳を過ぎて精神的にも体力的にも消耗するものです。そこで自分は、昼休みにお喋りや歩く運動に汗を流して体調管理に努めています。

鉄道サービス業は、どんな産業よりも地域に貢献できる付加価値が高い仕事だと自負しておる、当社に配属されても、JRとJR東労組で学んだ貴重な経験を活かして会社を盛り上げようという努力をしています。

しかし、リーマンショック以降の中小企業への打撃は大きいものがあり、会社の経営が大変であることを社員一人ひとりが認識をして業務に取り組んでいます。

この三月十一日に発生した東日本大震災は、岩手・宮城・福島、そして関東および長野と新潟で同時期に発生して、その影響はこれから幾多の厳しい現実が待ち受けているものと思われまふ。

私たちエルダー社員は、今までに「政策フォーラム」の中で、JR東日本を発展させる立場で沢山の提言を行ない、会社を築き上げてきました。これからも教訓を活かして、「六〇歳だからこそ解る提言」を積極的に今働いている会社に伝え、「自分の生きがい」としていきます。